

月例研究会（2011年11月30日）  
大原社会問題研究所所蔵資料から  
みるワイマール期ドイツ1924/25  
年選挙の実情と歴史的意義

栞田 大知彦

本報告の課題は、大原社会問題研究所所蔵の資料「1924〔年〕ドイツ総選挙ピラ」の内容を紹介・検討した上で、この資料を用いた研究の可能性を探りつつ、今後の課題を設定するところにある。

「1924〔年〕ドイツ総選挙ピラ」は、1924-25年、ベルリンにおいて本研究所の研究員が収集した選挙関連の資料群である。だが筆者が2011年に本研究所に着任するまで、その存在は広く知られてはいなかった。報告では、まず本年4月以降、筆者が整理してきた資料の概要をまとめ、現時点で考えるその魅力・意義について言及した。

整理開始直後、本資料には24年12月の国会選挙のみならず、25年3月の大統領選挙にかかわるピラも含まれていることが明らかとなった。前者は123枚、後者は50枚、合計173枚のピラ、ポスター、新聞等から構成される。前者を政党別に、後者を候補者別に整理し、各資料の内容を表に示した。時間的な制約から、報告では24年12月の選挙を中心に検討を進めた。

本資料の魅力の一つは、多様な政党のピラを収集した点にある。例えば、言及される場合が少ない小政党のピラも含まれており、当時の状況をより鮮明に描く上で有用と思われる。

次に、ワイマール期の選挙を対象とした研究史を整理し、24年12月の選挙の位置づけを検討した。「中間層テーゼ」が以前に比べ説得力を失っている一方で、ナチスを「国民政党」とみなす見方が強くなりつつある。また既存の研

究では、ワイマール期に行われた9回の国会選挙の中で、24年12月の選挙は必ずしも重視されてこなかった。24年5月に行われた直近の選挙では、前年のハイパー・インフレーションという共和国の危機に伴い左右両極の政党が議席数を大幅に増やしていた。だが、レンテンマルクの奇跡、ドーズ案の成立等により社会・経済が安定しつつあった状況を受け、政治の安定化をひとつの重要な目的に24年12月の選挙が行われたといえる。

以上をふまえ、資料の分析を通じて24年12月の選挙における争点および各党の動向を検討した。最大の争点は、議会制民主主義か、「帝政」かという点にあった。前者を擁護する勢力は社会民主党（SPD）を中心とする「ワイマール連合」であり、他の多くの政党は後者に肯定的な態度を示した。とりわけ国家人民党は、多くのピラに旧帝国旗を示す「黒-白-赤」の文字を掲げ、SPDおよび共産党を激しく攻撃した。選挙当時、非合法であったナチスの「偽装政党」も「帝政」を支持していたが、資料からは国家人民党が議会制民主主義の最大の敵と認識されていたことが読み取れる。また、共産党のピラにみられるSPDに対する激しい批判は、既存の研究が指摘してきた「労働（組合）運動の分裂」の実情を克明に物語るものといえる。さらに、支持政党が固まっていない層と推測される官吏や主婦等に対し複数の政党が支持を訴えていたこと、その中でナチスの「偽装政党」がより幅広い層に向け支持を呼び掛けていたことも明らかとなった。

上記のような選挙の状況を確認した上で、新たに検討すべき課題を複数提示し、簡単に展望を示した。本資料の検討は緒についたばかりであり、今後より幅広い観点から研究の方向性を模索すべきだと考える。

（ますだ・たちひこ 大原社会問題研究所兼任研究員）